

母ちゃんの 黄色いトラック

栗貝裕子



母と娘の黄色いトラック

深貝裕子

読売新聞社

母ちゃんの黄色いトラック 定価九八〇円

著者——深貝裕子 加野ヒロ子

杉浦里子

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇 千五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一 千八〇二

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——ナシヨナル製本

第一刷——昭和五十七年十二月十一日
第十三刷——昭和五十八年二月二十四日

0095—703390—8715

©1982, Yomiuri Shimibun-sha.

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

第三回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞 入賞作品集
母ちゃんの黄色いトラック 目次

優秀賞 母ちゃんの黄色いトラック

深貝 裕子

5

優秀賞 一四二号室

加野 ヒロ子

77

入賞 人工のオアシス

杉浦 里子

147

選後評

澤地 久枝

217

選考経過

223

装订
小林泰彦

母
ち
ゃ
ん
の
黄
色
い
ト
ラ
ッ
ク

優秀賞

母ちゃんの黄色いトラック

深貝裕子

ふかがい ひろこ 本名、深貝裕子。昭和二十四年三月五日、北海道生まれ。昭和四十二年北海道立北見柏陽高校卒業。同年住友生命保険（相互）北見支社入社。昭和四十五年退職、結婚。主婦。

現住所、北海道北見市高砂町一一の五一

夏は北海道でも三十五度を越える日があり、三十五度二分を記録した昨日の名残りか、今日は午前十時から二十七度もあり、うだるような蒸し暑さである。アスファルトには、照り返しで、ゆらゆらとかげろうが立ち、数メートル先は、雨に濡れているように光っていた。

車の中は、窓を開けて走っていても熱風が吹き抜け、狭い助手席で私の身体はジットリと汗ばむばかりである。

久し振りに北見から斜里へ向かう四トントラックを運転している母は、少しはしゃいでいた。一番スコップみたいに太く大きな手でハンドルを握る腕は、真っ黒く日焼けして、キラキラと輝いている。

「何か月ぶりだろうか」

と真っ青な空をふり仰ぐ母の顔が汗で光っていた。

月日の流れは早いもので、トラックを運転するようになって、はや二十四年、一言でいってしまふには、あまりにもはかなく、寂しすぎる。そこには強くたくましく生き抜いてきた人生があり、ロマンがある。

細長く続く瀟湘湖を見やりながら、エゾスカシユリ、ハマナス、エゾキスゲ等、赤、黄、朱色と咲き乱れる花の季節が終わりに近い原生花園付近の国道を、器用に運転しながら走り抜ける
と、もう斜里町の入り口付近——見渡す限りにジャガイモやビート畑が広がる直線道路に出た。

私はカーラジオの音楽にあわせて鼻歌を楽しみながら、日焼けして真っ黒な、苦勞じわのある母の顔を横目で見やりながら、この一人の女性の人生をしみじみと思い巡らしていた。

母、マサ子は大正十五年一月八日、北海道に生まれた。屯田兵入植の父母の九番目の三女で、兄弟は十二人であった。

東相内という所で村議をしていた祖父は、農業および酪農の仕事は一切せず、戦争で男手のないときはいきおい、三十二ヘクタールと、三十八頭の乳牛の飼育は、祖母ウンと子供たちの役目であった。朝四時から牛の放牧、乳しぼり、夕方牛舎へ牛を入れる仕事は、母が毎日やらされた。このあたりでは当時誰でも、六、七歳頃からすでに働いたのである。仕事の合い間に三キロ歩いて学校へ行くという状態で、複々式学級の授業は、あくびと居眠りが多かった。子供心に遊びたい、つらいと思いつつも、厳しい祖母についていけないわけにいかず、一生懸命働いた。しかしながら当時としては、それがごく当たり前だったのである。誰もが生きるために精一杯だったに違いない。

秋の村祭りが唯一の楽しみという生活だったが、母の今日あるのは、開墾農家のにない手としての生活が、はぐくんでくれたのではないだろうかと思う。

トラックのエンジンが停止したので、私はわれに帰った。

「母さん珍しいねえ、久し振りだね」

と、馴じみの商店の若旦那の声が聞こえる。

「お盆で、若いのが休みだからな」

と太く張りのある声だ。

「たまにトラックに乗ると楽しいもんだ」

と母は冗談を飛ばしながらも、手はプロパンガス十キログラムボンベ、二十キログラムボンベを、慣れた手つきで転がしながら、トラックの荷台から、収納庫のデッキへと並べていく。私は手伝いをしようともせず、助手席に乗ったまま、一年振りの、天気の良い日は、真近に知床連峰が見渡せる野原をぼんやりと眺めていた。いつもながら、何となく、ただトラックに乗ってみようかなと気まぐれで乗っただけであった。

しかしながら自然界の変化のなさに比べ、人間の成長、社会環境の変化は、二十年の間に、実にめまぐるしく移り変わったのであった。

二十歳のとき、母は運輸会社の運転手だった父、利夫と結婚した。長女の寿美子、次女の私、そして弟の長男哲也の三人の子供をもうけた。私の記憶の限りでは、母はずっと働きづめだった。

最初は農家への出向であった。春先から晩秋まで、朝早くから黒い色の百二十五cc（のちに二百五十ccとなる）オートバイで風を切って出かけた。

昭和三十年代当時、女性がオートバイに乗ることは、とても珍しかった。今日でいうならさし

ずめ「翔んでる女」とでもいうのであろうか。三時の休みに出たアンパンをおみやげに、夕方遅く帰って来て、休む間もなく、夕食の仕度に取りかかる母をしり目に、おみやげにもらった一つのアンパンを寸分たがわず分けて食べたときの味は、母の味と複雑に交錯した。

私と姉は母が働いているため、小さい頃から家事を分担させられていた。学校から帰ると、家のまわりや、近くの公園で、薄暗くなるまで遊び、友達が夕食のためバラバラと家へ帰ると、自分も家に帰って、茶碗を洗い、米をといで炊き、部屋を円く掃いたりした。保育所から帰って来た弟は、よくむずかるので、いつも手を焼いていた。

父も長距離運転手だったので、遅く帰る日が多かった。聞き慣れたオートバイの音が近づく、玄関前に飛び出して行って、母の顔を見ると、子供心にホッとするのである。

遅い夕食のあと、ラジオで天津羽衣の「母ちゃんしぐのいやだ」という連続ものを聞きながら寢床に入ると、暖かくって、とてもうれしかった。襖越しの父母の会話は、何であつたかは知る由もないが、共働きの親を持った私にとっては、家庭の臭いがするようで、うれしかった。私はそんなとき、弟とネコの取り合いをしたり、蒲団の中にもぐったりして、内面からフツフツと沸いてくる何かしら熱いものをどこへ向けたらよいのか、戸惑っていたのだった。

農家の出面という仕事は、冬場はないので、子供たちにとっては、うれしかったが、生来働きの母は、生活のことを考えて、父と同じ運輸会社のトラック助手として、荷物の配送をするようになった。これが、のちに生かされようとは、母も感じてはいなかったであろう。いや案外子知していたのかもしれない。なぜならば、母は助手として約三年間、トラックに乗っているうち

に、運転を見よう見真似で覚え、免許を取って自分もトラックに乗って何かしようと考え、実行したのであるから……。

母は仲間から「母ちゃん」と呼ばれ、持ち前のバイタリティーと頑張りで、皆から慕われていた。仲間と一杯飲むこともあり、その頃からお酒も覚えたらしい。

父は四十一歳のとき、腸閉塞にかかり、長い入院生活が始まった。そのとき母は三十二歳であったが、父が全腸癒着の大病のため、母は、病院、仕事、家庭と、目の回るような毎日になった。

小学五年、三年、五歳の三人の子供たちは心もとない日々を送るはめになった。学校が終わると私は弟を連れて、父が入院している病院へ見舞いに行った。手術後の父は歩けないので、子供たちで「おもゆ」と書いた食券を手に、父の食事を取りに行くのだ。ギシギシ鳴る長い廊下の一角にある炊事場は、七輪で魚を焼く臭いと煙でごったがえしていた。これは付き添いの人たちが、自分たちの食事の用意をしているのである。今ではもう見られなくなった光景である。私は消毒の臭いより、こんな雑多な臭いが好きだった。父の食事が終わると、残りもののカツゲンを手にした弟と私は、トボトボと誰もいない家へ帰るのだったが、今父に逢ってきたという何ともいえないぬはずんだ心が覚めやらず、鼻歌まじりにあっちこっちブラつきながら歩いたものだった。

「どこへ行っていたの」

と台所の戸口から顔だけ出して姉は夕食の仕度をしながら聞いた。

母は少し前、買い物をし、洗濯物を整理してから病院へ出かけたらしい。今晩は病院へ泊ること。

「三人で寝るの？」

味噌汁と焼き魚の簡単な食事を口に運びながら聞くと、弟の哲也に気をくばりながら、大人びた手つきで姉はご飯をよそいながら、

「あとで、深堀のおじさんが来てくれるらしい」

といった。余りよく知らない人だったが、母の知り合いの警察官であった。私たち姉弟は、父の病状も余り詳しく知らなかったが、何となく沈みがちな気持ちをあえてかくしながら、三人でお化けの話や、トランプをして遊んでいた。

「ごめんください」

男の人の声がしたので、

「あっ、深堀さんだ」

と私は大声を出した。

「ご飯食べたかい？ 今夜は、おじさんが泊るからね」

といったので、安心したら、急に先ほどまで三人だけでいたときの不安とこわさがよみがえって、私は思わず身ぶるいがした。とても絵の上手な人で器用にチラシの裏に軍艦や帆船の絵を書いて、弟を喜ばせていた。テレビのない時代で、私たちは本を読んだり、感度の悪いラジオの浪曲を何とはなしに聞きながら寝た。シーンと静まり返った襖越しの居間は、あまりにも寂しすぎて、蒲団の中はいつまでも冷えて寒かった。

朝、目が覚めると、人の足音がやけににぎやかに聞こえ、ラジオが鳴っているので、何かなと

起きてみると母が居た。

「母ちゃん帰ってきていたの？」

「ご飯食べに来たんだ。お前たちの様子も見にね。哲也を保育所へ頼むよ」

その朝の味噌汁と納豆のご飯はとてもおいしく、心はずんだ。

しかし、子供とは現金かつ鋭いもので、母の心配や看病の疲れを咄嗟に読み取ってしまうものなのである。姉とてそうであると思う。母は、黒い川崎のオートバイにまたがって、仕事へ出かけて行った。その姿は、子供心にも、実にたくましく、潑刺としていた。

私はカバンを鳴らしながら、走って学校へ行った。

三月も中ばというのに季節はずれの冷たい雪がチラついていた。足元はぬかるんでいて、私は長靴越しに靴下にはね上がる泥をやけに気にしながら、学校へ向かっていた。

今日は、私の小学校の卒業式である。

「母ちゃん、私ね、卒業式の日に答辞読むことになったんだけど……」

一か月ほど前のある夜、ご飯を食べながらいった。

「本当かい？ ウソだろう」

参観日など来たこともない母は、びっくり仰天していた。

「本当だよ、明日、練習用の紙を持ってくるから」

母は急に下を向いて、忙しくご飯を口に運んで必死にごまかそうとしていたが、目から涙がポロポロとこぼれていた。そして何もいわなかった。母は、強くたくましく、陽気に大声で笑った

り、冗談の好きな女ではあるが、照れ屋で、内面は繊細な神経の持ち主である。

父は、腸閉塞が全腸に及んでいるため、相変わらず入院していた。一年のうち何か月間かは退院して家に居るときもあった。その頃すでに会社からの給料は微々たるもので、肩たたきされる寸前で、母の収入が生活費の大部分を占めていた。

卒業式の前日、初めて母と式に着るセーラー服を買いにデパートへ行った。私はうれしく思いながらも、お金を使わせることに心苦しさを覚えた。

「これがいい」

出来あいのセーラー服ではあったが、ピッタリで、試着室の鏡に映る顔は、ほおが紅く染まっ
て、妙に大人びていた。久し振りに休みをとった母は、答辞を読む私のことがうれしらしく、
売り場の店員に、

「この子ね明日の卒業式に答辞を読むんでね」

と自慢していた。私は「関係ないのに……」と少々腹立たしくなったりした。

「時間に遅れないでね」

そういう声を背に、母は毎日の仕事で日焼けした顔に薄くお化粧をほどこしていた。

卒業式も終わりに近づいた頃、

「答辞、伊藤裕子」

と呼ばれた。席を立って、壇に上がる途中、母の前を通った私は、見ないふりをしながらも、